

都市の歴史的市街地の集住体における居住環境と環境認知の関係性
 - 佃街区における環境認知の構成の変化について -

日大生産工 (学部) ○渡邊 啓生
 日大生産工 (院) 高野 祐太
 日大生産工 大内 宏友

1. 研究の目的と背景

東京における歴史的市街地では、居住、道、川、細街路など歴史的な環境と連続的な繋がりを培ってきた。だが、現代の歴史的市街地においては共有の意識は失われつつあるといえる。

都市の歴史的市街地の集住体における居住環境と環境認知の関係性を考察することを目的とし、本研究では、佃街区における環境認知の構成の変化について分析・考察を行う。

2. 研究方法

■調査対象地域

東京都中央区佃1丁目1～10番地

■調査期間

第一期 1996年6月20日～21日

第二期 2012年8月4日～5日

■調査内容

調査内容は以下に示す(表1)。

■調査方法

現地調査では1/200の白地図とアンケート記入用紙を使用し、ヒアリングによる悉皆調査を行った。調査対象は中学生以上の地域住民とし、基本的にアンケート記入用紙は調査員が記入し、白地図は被験者に記入した。それにより、結果有効回答61サンプルが得られた。アンケート内容と被験者概要・被験者の家の位置を以下に示す(表1、2)(図1、2)。

表1 アンケート調査項目

調査項目	調査内容
属性調査	年齢、性別、居住年数、家族構成
街区調査	戦前建築、ビル、商店、再開発地、空地 路地寄与率、路地エッジ数、平均階高
領域調査	・近隣付き合いの領域を地図上に記入してもらう ・日常生活行動の領域を地図上に記入してもらう
生活調査	・冠婚葬祭への参加の有無 ・冠婚葬祭時の路地使用の有無 ・共有物の有無
意識調査	・家屋について増改築の有無 ・環境変化について ・外部からの視線について ・環境に対する変更の意志について

表2 被験者概要

項目	人数	
	1996年佃	2012年佃
性別	男性	20
	女性	41
年齢(歳)	12～40	9
	41～55	14
	56～70	26
	71～	12
居住年数(年)	～15	11
	16～30	9
	31～45	11
	46～60	16
	61～	14
合計	61	61



図1 1996年佃被験者の家の位置

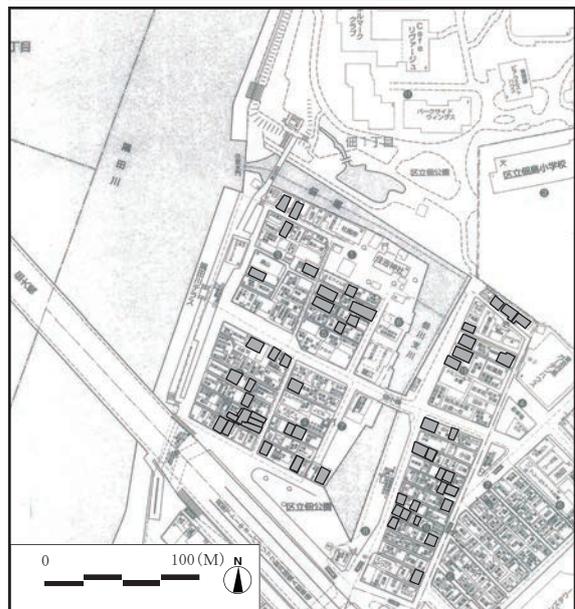


図2 2012年佃被験者の家の位置

Formulation of Habitat and Environmental Recongnition Relationships of Historical Downtown of City
 -the Physical Environmental Change in the Tukuda Blocks-

Keisei WATANABE, Yuta TAKANO and Hiroto OHUCHI

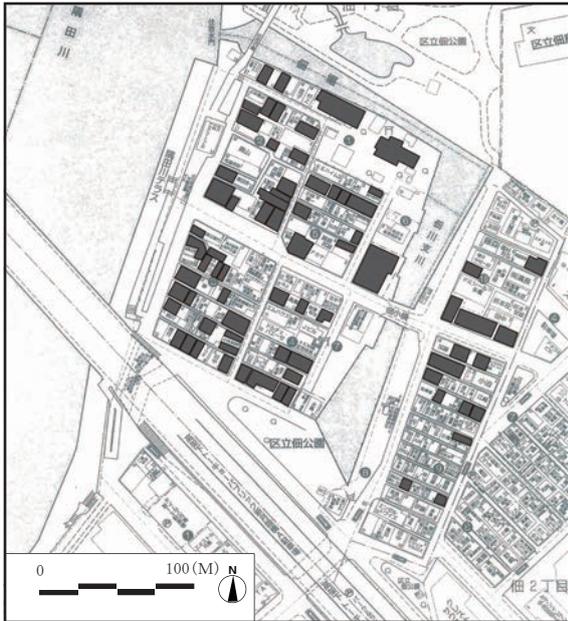


図3 1945年から存在する建築物

3. 1996-2012における街並の物理的变化(図5)

建物数において顕著な変化がみられるのは住宅、商店（飲食）、空き家である。住宅数は佃1丁目1～10番地内で、21戸減少している。

住宅が減少しかわりに空き家となる傾向が見られた(図4)。1996年の佃1丁目内には、飲食店は無かったのに対し、2012年では2件できている(図4、5)。集合住宅の数は、2012年で15棟と1996年と比較して3棟しか増加していない。増加した3棟は、いずれも佃1丁目の9番地内で駅・大通りの近くに面している。1996年では公園予定地であった箇所にも2012年には公園が整備された。また、隅田川沿いに波止岸壁と親水テラスができた。1996-2012の間に佃1丁目の「リバーシティ佃」和佃島を結ぶ住吉小橋が架かっている。

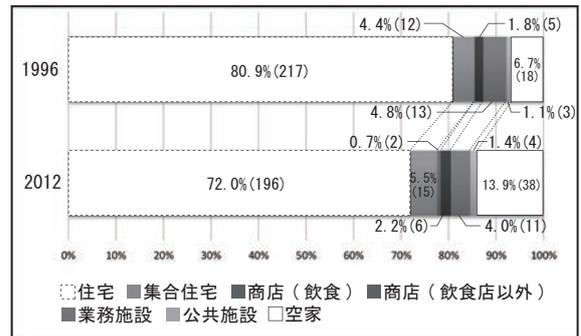


図4 佃街区内の建物数の変化

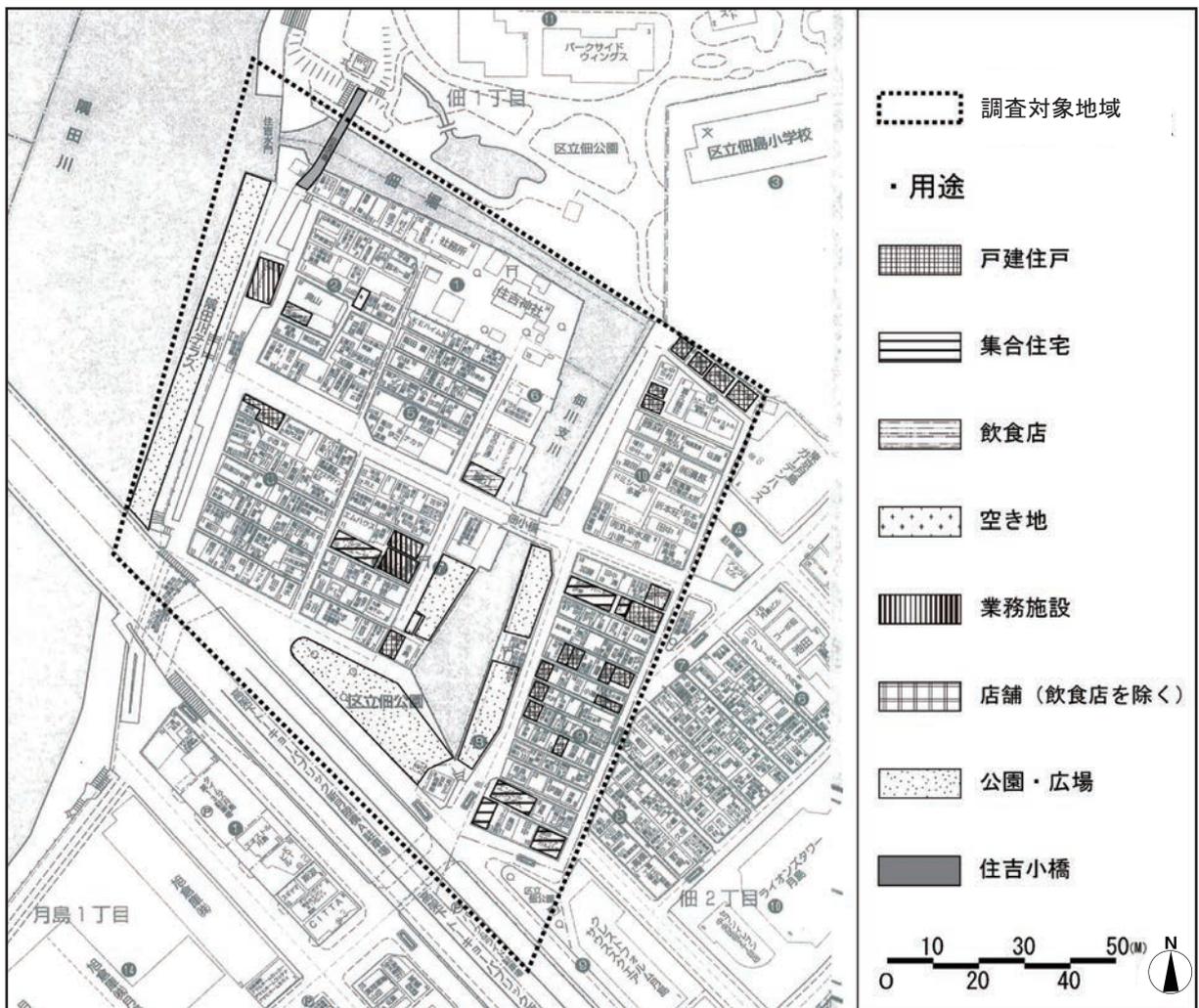


図5 1996-2012における佃街区的変化



図5 1996年「近隣付き合いの範囲」認知領域



図7 1996年「日常生活の範囲」認知領域

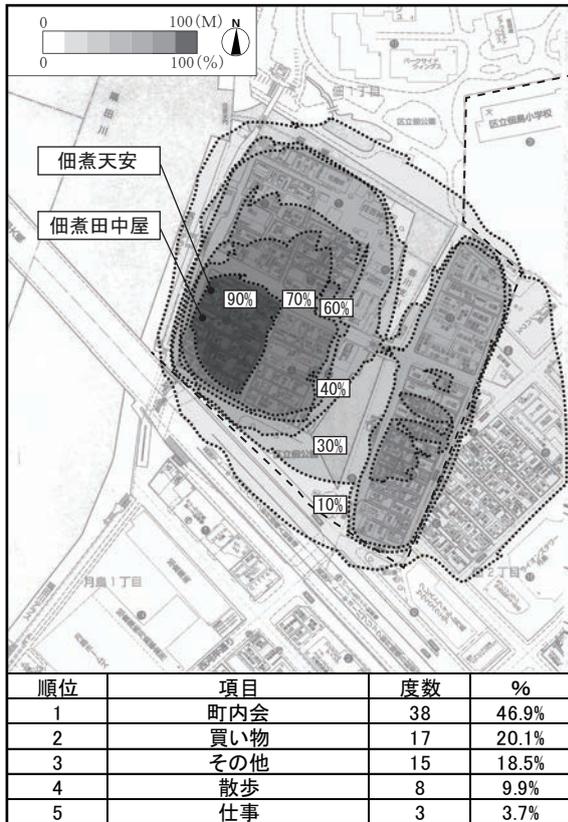


図6 2012年「近隣付き合いの範囲」認知領域

表3 2012年近隣の項目表内「その他」の内訳

その他			
順位	項目	度数	%
1	近所付き合い	6	66.7%
2	知人	1	11.1%
2	親戚	1	11.1%
2	子供の世話	1	11.1%

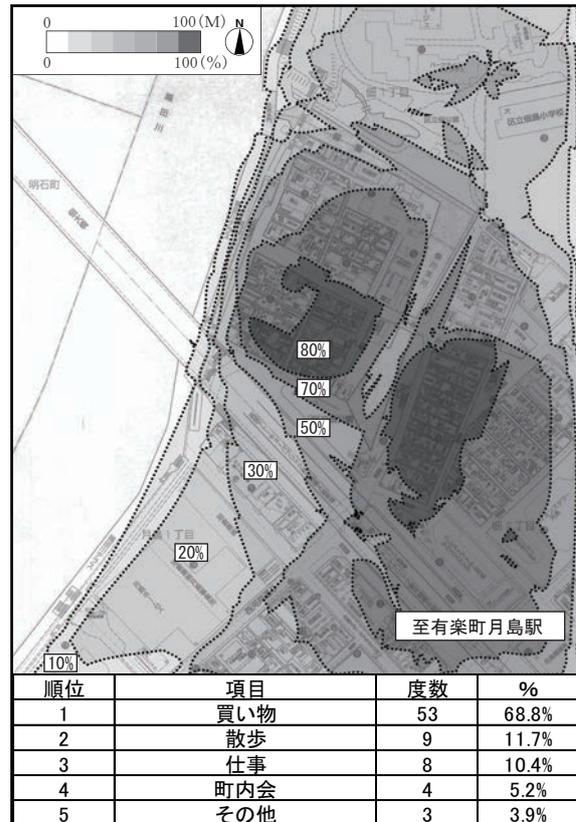


図8 2012年「日常生活の範囲」認知領域

4. 居住者の環境認知についての考察

圏域図示法^{*)}を用いた認知領域調査より、被験者の「近隣付き合いの範囲」と「日常生活の範囲」の認知領域を集計し、認知領域図を作成する。佃1丁目をまとめた認知領域図の分析

を行った。認知領域図のプロットは認知領域の構成要素^{*2)}を表し、パーセンテージは各認知項目の領域を重ねた時に、被験者の何%がその領域を認知しているかを表している(以降認知強度と呼ぶ)。表の%は認知度^{*3)}を表している。認知領域図及び認知領域構成要素項目の順位表(属性別)から、居住者全体の認知領域の広がりとその構成要素について次のように分析する。

■1996年「近隣付き合い」の範囲(図5)

1996年当時、佃1丁目内で唯一存在した食料雑貨店である佃屋酒店・山本商店の付近を中心に認知強度が強くなっていることが分かる。認知領域は、佃1丁目の町内会内で収まっていて佃2丁目の町内会の認知は無いことが分かる。認知領域が、佃1丁目の町内会内で二分されており、佃川支川が境界になっていることが分かる。認知領域の認知強度の強い部分が分散しているのは、構成要素項目の順位表から2位「その他」の近所付き合いが影響していると思われる(表3)。

■2012年「近隣付き合い」の範囲(図6)

佃1丁目の3番地全域の認知強度が強い。3番地内には、「佃煮天安」「佃煮屋田中屋」といった佃煮屋がある。2つの商店(飲食店以外)から認知領域が、面的に広がっている。

認知領域が、佃1丁目の町内会から佃2丁目の町内会にまで広がっていることが分かる。

■1996年日常生活の範囲(図7)

日常生活の認知度80%の範囲が、佃地域よりも月島地域で広範囲に及んでいる。特に月島の西仲商店街の方向に認知強度が強く、構成要素項目の順位表から「買い物」が最上位であることから、「日常生活」の範囲においては買物が認知強度に大きく影響してくることが分かる。区立佃公園や佃川支川沿いの公園予定地の認知強度が強い。日常生活の認知領域は、住宅地と各拠点である「西仲商店街」「月島駅」「区立佃公園」などから広がりをもち一体となっていることが分かる。

■2012年日常生活の範囲(図8)

日常生活の認知領域は、佃1丁目の住宅地を中心に広範囲へ広がっている。認知領域の範囲が駅よりになっている。構成要素項目の順位表から「買い物」「仕事」などが上位にあることから、電車の利用が住民の環境認知に影響していると考えられる。認知領域が広範囲に拡大しているのは、構成要素項目の順位表から「散歩」が大きく影響していると考えられる。

■「近隣付き合いの範囲」の認知の比較(図5,6)

認知領域の範囲の中心が「佃屋酒店・山本商店」から「佃煮天安・佃煮田中屋」へと移行したことが分かる。1996年よりも2012年の方が、認知が広範囲になっている。また認知領域が、

佃1丁目の町内会で収まっているのに対し、2012年では佃2丁目の町内会にまで広がっている。1996年では佃川支川で近隣付き合いの範囲は二分されていたが、2012年では一体となり広い領域となった。

■「日常生活の範囲」の認知の比較(図7,8)

1996年では、認知領域は各拠点から広がり繋がっているのに対して、2012年では住宅地から面的に地域全体へと広がっていることが分かる。1996年は、隅田川沿いは整備されていなかったため認知領域が無い状態であるが、2012年には親水テラスなどの整備によって認知領域が隅田川沿いまで広がっている。また、住吉小橋や公園の整備により住人たちの利用が容易になったことも認知領域が広がった要因に影響している事が分かる。

5. まとめ

本研究における考察を以下にまとめる。

1) 「近隣付き合い」の範囲と「日常生活」の範囲は、1996年と2012年を比べ、認知領域が広がっている事が分かる。

2) 1996年2012年共に、「近隣付き合い」の認知には「町内会」の影響が大きく、「日常生活」の認知には「買い物」の影響が大きい。

今後の展開として居住者の環境認知を形成する変化の要因及び相互の関係性について考察する予定である。

【注釈】

*1) 圏域図示法：この方法は、対象地域を認知している被験者を対象とした場合に有効であり、自己の住居の周辺地区などの比較的限定された小地域の空間を対象とした研究に適用している。認知の有無や広がりなどの量的な側面だけではなく、被験者の内部にある空間の切れ目を示してもらうことにより、間接的にその構造を探ろうとするものである。

*2) 構成要素：各認知領域の構成要素、点的要素、線的要素、面的要素、時間変動要素に分類する。構成要素間相互のまとまりをぶんせきすることは地域における認知領域の把握において重要である。

*3) 認知度：ある地区において、個人(サンプル)が認知する場所の和がその地区の回答者数を占める割合。その場所における認知のレベルを示す値。[認知強度=(認知項目数/回答者数)×100]

[既往研究論文]

1) 太田光則・大内宏友：「都市の歴史的市街地の細街路空間における集住環境の実証的研究-生活領域の実態よりとらえた細街路空間の類型化-」日本大学生産工学部平成8年度修士論文概要集、1996年

2) 井尻智・大内宏友：「都市における近隣・生活領域の画像処理を用いた集合単位の設定」日本建築学会技術報告集、第12号pp,215~218、2001年

3) 大内宏友・井尻智・竹田真一郎・桜井雅頭・山田浩一郎：Corroborative Study on Alley Space in the Environment of Multiple Dwellings in the Urban Traditional Areas in Tokyo, STUDIES in ANCIENT STRUCTURES. Proceedings of the 2nd International Congress, 2001

4) 大内節子・山田悟史・大内宏友：Study of the dwelling environment formation process in historical urban areas of Tokyo, ENHR(European Network for Housing Research) International Conference, Rotterdam, Kingdom of the Netherlands, 2007

5) 千葉勝仁・高野祐太・大内宏友：「都市の歴史的市街地の集住体における環境認知の形成に関する研究-月島街区における環境認知の構成とその変化について-その1」日本建築学会大会概要集、2012年

6) 高野祐太・千葉勝仁・大内宏友：「都市の歴史的市街地の集住体における環境認知の形成に関する研究-月島街区における環境認知の構成とその変化について-その2」日本建築学会大会概要集、2012年